

世間堂棟由來

三の切

二四

平太郎住家の段

〔解題〕 卅三間堂棟由來を材題とした淨瑠璃としての古いものは、延寶九年刊行の宇治加賀掾の段物集「大竹集」の中に出てゐる「熊野權現」などが古いものであらう。その完本は未見であるが、該書に載つてゐる「平太郎道行」は、柳の太木を平太郎親子の力によつて都迄曳くといふ筋で、明かに棟木の由來を材題としたものである。次にほど同年代のものかと思はれる古淨瑠璃の正本として私の見たものに「熊野權現開帳井平太郎奇瑞物語」がある。同じく「平太郎道行」はあるが、前のものと同文でないから別の物と見てよいと思ふが、これは平太郎の復讐、棟木の由來、お柳の子別れなどが鮮かに取扱はれて居る。尙この外に「都三十三間堂棟由來」と題するものがある。これは山本河内掾の作で伊藤出羽掾の正本であるが、前記の作の改作と思はれる。尤も作柄は原作より劣つてゐる。

處で上記の古淨瑠璃を藍本として出来たのが「三十三間堂平太郎縁起祇園女御九重錦」で、これが即ちこゝに収めたものの原作である。この曲は寶曆十年十二月十一日から豊竹座で興行されたので、作者は若竹笛舁・中村阿契である。

白河法皇の前生は蓮花王坊といふ修験者で、熊野に籠つて修行した功德によつて今法皇と生れ給うたが、その前生の觸腰が柳の古木の梢に留つて居るが故に頭痛の御惱を遊ばすのだとの御夢想によつて、その柳を棟木として一字の御堂を建立して、その觸腰をこゝに奉納する事となつた。處がその柳は既に五年前に故あつて伐倒されるべきを熊野參詣の武士横曾根平太郎の働で免れたので、その精魂は女と現じて平太郎と契り子迄儲けてゐる。然るにいよゝその柳が伐倒される時となつたので、こゝに別離の悲しき場面が展開される、それが即ちこゝに収めた三段目の切である。都よりの奉行進の藏人からいよゝ柳が伐られるといふ事を聞いたお柳はこれ迄と、外から戻つた夫にお神酒の餘りをすゝめてそれとなく別れを告げ、酔つて眠るを見届けて夫と子とに別離の述懐となるといふ段取りである。葛の葉子別れと類型の作柄で、夢幻的の情景の裡に人情がしんみりと融け合つて居る。

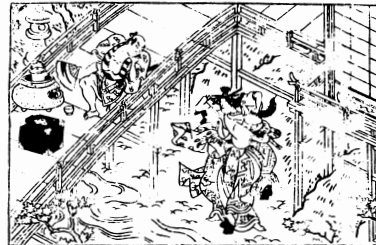
本曲は三段目の切が初演の時も好評であつたが、翌年四月曾根崎新地で豊竹座一連によつて繰返された後、操りでは久しく上場を見なかつたのを、文政八年七月十七日から御靈境内で「卅三間堂棟由來」の外題で三段目だけが上場され、爾來、同じ外題の下に三段目即ち平太郎住家のみが度々上演されて今日に及んで居る。その詞章は「九重錦」と殆んど同文である。

へ夢や結ぶらん。地妻はあたりを立 夫は寝付きの高躰。たなひ風が持て来る斧のみを。ちつと堪へて立寄れど。長退いて。タ、キカリ奥を覗いつ立戻り。音。伐木とうゝてうゝと。木を伐得も岩代の結び松。我は柳のみどり子おづゝ傍へ立寄りて。揺り起せども。る音やこたへけん。お柳は身内の苦し。顔を眺めつ地フシとつ置いつ。地

やうに氣をしづめ。詞オ、それよ。互に顔を合せては。身の上語るもおもはゆし。寝入り給ふを幸ひに今。自らが言ひ残す。地必ず夢と思さずと。あからさまに聞いてたべ。詞ナウ我こそ誠は柳の精。雨露の恵みに生育ち。かやうに夫婦となる事も。一方ならぬ因縁ぞや。先の生にて誓ひたる。契りを結ばんその爲に。假に女の姿と變じ。地柳がもとに待受けて。夫婦となりしも五年の。春や昔の春の頃。詞季仲が鷹狩に。鷹の足緒にかゝりし時。數多の武士に切崩され。既に枯れなんこの柳。其時お前が一矢の手柄。鷹を助けて葉柳の。枝に障りも。合アレ〜。又もや爰に散り来る葉は。我を迎ひに来るかと。地思へばやる方詮方も。なく〜見やる足元へ。散り来る柳の葉隠れや。フシ亂るゝ心押鎮め。詞其時の情

の恩。送る月日も重なりて。柳の花の廻り。尋ね迷ふ稚子を。見るに堪へかにコレこの縁丸。もはや今年で五歳の。春秋の重なれば。乳がなくと育つべし。成人の後々は。父の弓矢を受け傳へ。深い名を上げてたも。ヤヤ。地母は今を限りにて。元の柳に歸るぞや。必ず草木成佛と。回向を頼む夫子よ。離れがたなや悲しやと。いふ聲さへも忍び泣き立つて見居て見聲上げてわつとばかりに泣叫ぶ。音に目覺す平太郎。扱は夢とも現とも。聞きしは誠でありけるか。何とてつれなくやるべきぞと抱き留むれば一間より。老母も共に轉び出で。詞様子は聞いたコレお柳。嫁度わが身と同じ事。一人の子を残し置女なうと。地呼ぶ聲も。散り来る柳の葉き。カ、リ信田の古巢に歸りしとや。地がくれに。フシ形は消えて失せにけり。それは野干の年ふる身。我はもとより地そこよ爰よと母と子が。尋ねる音に草木の。歸る古巢の柳は今。切崩され縁丸。詞母様どこへ行かしやつた。母て枯れ柳。歸るといふは消ゆる身に。地母様と父が後に駈何とて形を残すべき。哀れと思し。フシ

給はれよ。詞白河の法皇^{ほうわう}の。御惱み頻き上げ。詞ナウ母
りとて。都の使來りつゝ。我を切捨て
申すなり。最早朽木も時を得て。一字
の楳^{もも}となる事も。一つは妙なる法の縁^{えん}。
佛果^{ぶつぐわ}につれし縁あれば。地情の恩を報
ぜん爲。一つの形見參らすと。平太
郎が手に渡し。詞、それこそは白河の
法皇の前生^{ぜんせい}の御頭^{みづかぶ}なり。ナ、それを手
柄に御身の上。再び出世をなし給へ。
必ず、縁が事お頼み申し參らす。
エ、。離れがたなや可愛^{めづ}やな。ア
レ、風^{かぜ}の音につれ。柳の糸を切拂ふ。
端^{はな}斧^{きりぎりす}鉞^{きりぎりす}が丁々々。フシ御^みは爰^{こゝ}に。魂^{たま}
極る。時こそ來たれいざさらば。さら
ば、の聲の下、フシカリ姿は。見えす
なりにけり。わつとばかりに三人が。
闇より闇に迷ひつゝ互に手に手を取り
かはし。スエテ前後不覺に。歎きしが。
地涙ながらに平太郎。我が子を膝に抱
き上げ。詞ナウ母
人。我よりはこ
若が。愛著^{あいじやく}に引か
されて。さぞや名
残りの惜しから
ん、たとへ姿は見え
ずとも柳は妻が亡
き面影。今一度こ
の縁に見せもし。
又我も見もした
し。藏人^{くらひ}とやらん
にも對面せん。母
人にはこの慟懷^{もつかい}。

祇園女御九重錦 五段續
 座本 豊彦越前少掾
 太夫 豊竹院前少掾
 三上三上
 平太能總

頭取	三味線	二音	三音	四音	五音	六音	七音	八音	九音	十音	十一音	十二音	十三音	十四音	十五音	十六音	十七音	十八音	十九音	二十音
...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...

ア然らば直ぐさま。サア縁よ來い。地と
我が子の手を引き二足三足。深山がく
れの山寺に、入相告ぐる鐘の音。數へな
がらもそろ／＼と。探る足元見付ける
母。詞コレ平太郎。そなたは何とぞし
やつたか。コレ婆様。父様は目が見え
ぬわいの。ヤア／＼。そりやマアいつ
から。ハイさればでござります。一月
あまりふと鳥目とりめが起りましたが。女房
にもいひ含め。是まではお隠し申した。
エ、聞えぬ平太郎。さういふ事なら疾
くよりわしにも。ア、コレ何にもお構
ひなさるゝな。したがお前にもこの坊
めも。マ今夜からさぞ便りが。オイノ。
折も折とそなたの眼病。猶更わしも力
がない。ア、アレ／＼。モアノ雪の降
る事わいの。マア火を燈しませうと、地
行燈に。手早く燈し提灯ていとうを移し持った
る縁丸みづう。蓑みよと打著せて。詞そん

なら。一寸參つて
さんじませう。オ
オ怪け我せぬ様に。
ソレ縁よ。手を引
けよ。アイ／＼
／＼。地あいろは
見えぬ鳥目の父。
杖は我が子を力草
林はやし柳やなぎが。へ木へと
連り行く。地母は
佛間の石經いすずに。鉦かね
もかすかに六字詰
め。本シ風も身に
沁む黄昏たふし過ぎ。地
心の鬼の和田四郎
書問しよもんの騙かたりか
てより。夜は山賊さんぞくの
大膽だいたん不敵ふてき。何でも
掘り出し。道其力みちきり、リ



しためんと。大だら差足コハリ窺ひ足。
ぎしつく疊の物音に。誰ぢや〜。調イ
ヤ大事な盗人ぢや。ヤア〜と恠りし
ながらも。調イヤモウ。折角這入らし
やつても。見込みのない此内。了簡し
て去んで下され。イヤコリヤ婆。おれ
ぢや。晝來た者ぢやが見知らぬか。ム
ウナニ。晝來たとやるからは。オ、
畑主と言うたはありや嘘ぢや。山家の
とろくに似合ぬ。黄金十枚はハ、よい
仕物。まだ隣くりがあるであら。ありだ
けそこへ淺へ出せ。コリヤ命は助けて
やるわい。いと。地フシ鯉口ならし威し
ける。調エ、口惜しい。それと知つたら
其時に。やみ〜とはやるまいもの。
エ、平太郎は戻らぬかいの。エ、喧し
いわい。コリヤモウ。どうで素直では
出しをるまい。ドレ探してくれんと。調
騒行くを。さうはさせぬと取付くを。調

飛し〜のつかのか。納戸を引出す古
葛籠あたふた明けて手に當る。親子が
着換に包んだ大小。鮫は鼠がまだ外。
に。御明上げた釣おまへ。供へし觸腰を
見て恠り。どこやらぞ〜がみフシ立退き
しが。地打ちうなづいてコリヤ婆よ。調
葛籠に刀があるからは浪人に極つた。
ガ又。あの觸腰は何の爲ぢや。サアそれ
ぬかせ。オ、あれは。息子が出世す
る大事の物ぢや。ム、何ぢや出世する。
ガ其出世が耳寄りぢや。コリヤ。何者
の觸腰ぢや。サアぬかせ。ぬかさぬか
やい。ぬかさへ斯うぢやと。地引抜
く段半。目の先へ差付くれば。調ア、
イヤ〜。壁へすた〜に切られ
ても言はぬ〜。ヤアどしぶとい老筆

付けたる猿しぼり。調サア〜ぬかせ
ぬかせ。地というては引張る釣繩に。
次第に締るしぼり繩。血筋赤らむ葛籠。
フシ命の蔓ぞ危ふけれ。調ハ、ハ、ハ、
もがくわ〜。情の強い根性から。痛
い口を見をるわい。コリヤ。下は滑ら
の溜り池。氷の地獄ぢや。サアぬかせ。
ぬかせと。地責めぜつちやう。老母は苦
しき聲も出す。降りくる。雪に争ふ白
髪。鯉にしたふ血の涙。見やる向うに
提灯の。光にびつくり南無三と。繩を
放せば眞逆様。水の溜りへおちこちの
無慚なりける次第なり。さすがの四郎
も狼狽へ眼。表へ逃げんも一筋道。や
り過して行かんずと。庵の庭にフシ身
を忍ぶ。地斯くとは知らぬ平太郎。案
内はいつも我が門に。常燈明の光さへ
提灯の火に縁丸。調コレ父様。佛様へ
とぼした行燈が落ちてある。ヤア。ど

れ。ほんにコリヤ落ちてある。不
思議。地不思議と門の口。調母者人。
申し漸う今歸りました。母者人。に猶も口寄せ。調コレお心儘かに。母
コレ。緑よ。母人は見えぬか。アレ人様。と。地聲を限りに呼び生くる。
父様。婆様が池へはめてあるわい。やう。に目を開き。糸より細き聲を
の。地ヤアと驚き走り寄り。探り尋ね上げ。調オ、平太郎。孫もそこにか。
の手先へ觸る。細を力に親と子が。やうハイ。緑も爰にをりまする。お心が
に擔ぎ上げ。調コレ。申し母者付きましたか。モ何やつがこの仕業。
人。何者がこの様に。婆様イなう。オ、何者とは實來たやつが。ム、扱て
地といへど答もあら悲しや。體は氷と。騙であつたるよな。シテ。どつ
冷え切つたり。こりや何とせうどうせ。ちへ失せました。ア、コレ。平太郎。
うと。駈出しては駈戻り。立つたり居母が横死は定まる業。随分身をば大切
たり氣は半亂。調エ、。日が明きたに。曾根の苗字を起しなば。これに上越
い。開きたい。地鳥日は何の因果ぞと。す悦びはない。地随分親子長生して。
母に取付き身を問え。ステ聲をばかり。末の榮えを見せてたも。調それが冥途
に。歎きしが。調ハツアさうぢや。水にの土産ぞや。地取分け不便は孫縁。今
溺れし體には。薬を焚いて温むれば。一度顔をと引寄せて。聲を限りの口説
再び息を返すと聞く。オ、それよく。言。可愛や親には思はぬ別れ。辨へも
と。地父親が。差圖に袈を掻集め。蠟燭なき子心にもさぞや便なう思ふであ
る。可愛の者やいちらしや。又一つに
は嫁お柳。可愛い夫子を振捨て。歸
る柳は切崩され。魂宙字をうろ。と。
繼に引かれ迷ふであろ。コレ。魂家の棟離れすは。今一度姿をば見せ
てたもと口説き欺けば平太郎。今日は
いかなる悪日ぞ。妻には別れ其上に天
にも地にも掛替なき。たつた一人の母
人が非業の別れは何事ぞと。悔みの涙
はら。かゝる愛目をみ熊野の
那智のお山の。瀧津瀬も一度に。フ
落ちくる如くなり。地老母は今はの聲
の下。調ナウ平太郎。縁が事を頼むぞ
や。と地いふが親子の一世の別れ。フシ
カ、はかなく息は絶えにけり。重なる
思ひに親と子がステ前後不覺に。歎
きける。地様子ををつくつと和田四郎。後
に立つてせうら笑ひ。調ハ、。婆
めはくたばる。父めは眼が潰れたな。

ムさう言ふは盡うせた騙かたよな。目前母いわい。いつその事に此小倅。芋さしたつ立つたり。詞ヤ父様。強うなつの仇敵あだかたの覺悟かくごひろげと言はせも立てず。にしてくれん。と、地ち段平逆手だんぎやてに取直せ。たの。オ、坊やよ。父はモウ目が見えるコリヤヤイ。眼も見えぬ態さまをして。じば。アレエ〜と泣く聲に。今は堪た兼かぞよ。嬉しいか〜。何より大事はこの御頭みづかしと。地ちしつかと渡す後の方。這ひ上つたる和田四郎。腕を固めて斬込むを。心得こころえ鉄てつにてしつかと受止め。詞かう目が明けば百人力。盗人風情ぬすびとぶしやうののれらに。刀を當てるは刃の穢けがれ。うぬに似合うた鉄の刃先。老母が敵觀念てきくわんて来る。此手をちやつと引いてくれ。の羽音二聲三聲雲間をさして飛んで行く。その際に和田四郎。獨體ひとりを小脇こわきにかい込んで。詞白狀をひろいだ褒美ほうびこれ喰くらへと。地ち斬付くる。かい沈んで利腕きうでんしつかり。詞コリヤどうちや。イヤ汝は眼が見えるかよ。オ、アレ〜と緑丸。逃行にぎやう首筋引掴み。詞サア小びつちよから背さなもか。サア。サア〜。蟻あみの這ふまで見えるは不思議。〜何と。と、地ち人質取つたる手詰と手ヤア〜。ヤそんなら生けて置かれぬ。と、地ち斬込む刀ひつたり。詰つめ。詞エ、〜此目が明けて欲しいな。池の深みへ頭轉倒くづりかへ。フシ尻ひつからげ南無權現様〜。お柳やい。ヤア喧し

年の誠神や力を添へぬらん。斬伏せ
／＼乗つかゝり。老母の敵婚しやと。親
子は體路付け／＼フシ嬉しさ限りな
りける。地折からさつと冷風の。身に
しみ／＼と泌み渡り。親子は顔を振上
ぐれば。影あらぬか縁が母。調ナウ
平太郎殿。御身多年の孝行と信心の功
徳により。月日の兩眼明らかに。忽ち
敵を討つたるも。大權現の神勅なり。
肌の手りを見給へ。と地いふ聲ばかり
聞ゆるにぞ。始めてはつと心付き。誠
なる。地驚固の武士進の藏人騒ぐな者
に不思議はこの兩眼。眼前敵を討つた
るは。偏へに神の加護なるか。と懷中
の守より牛王取出しよく見れば。調數
多の鳥の影もなく。扱こそ大靈權現の。
不思議を見せしめ給ふかや。ハア／＼
／＼地有難し／＼と。肝に銘する折こ
そあれ。又も羽音は悦び鳥飛びつれ
／＼フシカ、目のあたり開きし紙は忽
ち。元の牛王となりにける。かゝる
所。左様ならば此柳。新宮の濱先ま
で。跡は海手を流さんと。地錦の袋を
手に渡し。調御頭を是に包まれて。跡
より登り給へかし。我は先立ち法皇へ。
この趣きを奏聞せば。曾根の家を引起
し。父の敵時澄。折を以て某が。宜し
う手引き仕らん。イザ御用意と勸むれ
ば。ハ、ア。地奈しと一禮のべ。縁諸
共立ちかゝり。木遣音頭は父が役。か
さす届もしをれ聲。音頭無慚なるかな
稚き者は。母の柳を。都へ送る。元は
熊野の柳の露に。育て上げたるその縁
子が。ヨイ／＼ヨイトナ。調こりやお
れが母様かと。地綱引捨てゝわつと泣
き縋り歎けば父親は。涙に聲も枯柳。
引けば。引かるゝ恩愛の。孫よ。孫よ
と夕まで。いとしがつたる老母さへ。
道の巷に葬らんと。かきいだきたる孝
の道。忠義に厚き藏人がいさめて歸る

都の土産。カン^{カン}柳^{リウ}と柳^{リウ}と契^{ケイ}りたる。連^{レン}ふ。棟^{ムササビ}の由^ユ來^{ライ}因^{イン}縁^{エン}を語^{カタル}り。傳^{デン}へていち
理^リがへりや楊^{ヤウ}枝^ジ村^{ムラ}。女^メ夫^{トコ}坂^{サカ}とて言^{イハ}ひ傳^{デン}じるき。